



金子藏書



連袂至要抄

目錄

第一也奇門起

第二 雜言古用意

第三 心裁

第四 雜句切字

第五 子字発句

第六 七四り

第六 大まり

第七 三限切

第九 三字切

第十 二字切

十一 面切字あしきりみ発句

目錄

十二上切字と書く下と我とぬ事

十三成りし海ぬ事

十四早ぬふぬ事

十五者句事付中右南世凡神

十六眼事十七才三并面付十一句返り

十八一吹事十九再返付事

二十二く折事二十一音事

二十二手事二十三やの事七の事

九あてどらり事 九五上れ句てどら

十同よりよれ事 十一上て海事

十一よどりり事 十二下り句よどら

十三はらり事 十四らり事

十五してぬ事 十六らん事

十六海事十七字十八事

十七一字事十八事十九事

十八とどりの事十九事

元々その名の通りである事。

甲十うぶひらうのわくうらうのそのまはら

甲十一はるのう 甲十二むらぶみの字

甲十三かまひ又并地又甲十四ぬらふのうはら

甲十五現在へく又字まそいともももももも

甲十六もれ字の事 甲十七假ふと略しうら

甲十八きわねてあまむじ甲十九めわのてあま

甲二十めら 甲二十一抱かい

甲二十二かも

甲二十三かよ

甲二十四いひのあつ

甲二十五いんごま

甲二十六あん

甲二十七あすやん

甲二十八あざり

甲二十九あま

甲二十九あま

甲三十あや

甲三十一あやめ

甲三十二あん

甲三十三あら

甲三十四あら

甲三十五あら

甲三十六あら

六十八 せめてき

六十九 せめてき

七十 せめてき

七十一 八字の付所

七十二 音連性

七十三 首切連性

七十四 同種病

七十五 不冠著

七十六 不冠著

七十七 音連性

七十八 作り字の句

七十九 主をきく句

八十一 句の句の句 八十二 同意をきく句

八十三 句の句の句 八十四 体言の身賦成事

八十五 体言の合句の句 八十六 体言の句の句

八十七 句の句の句 八十八 句の句の句

八十九 下句の三五三四 九十 又字案りの句

九十一 句の句の句 九十二 句の句の句

九十三 句の句の句 九十四 句の句の句

九十五 句の句の句 九十六 句の句の句

九十七 句の句の句 九十八 句の句の句

九十九 句の句の句 一百 句の句の句

百 ませでかきん 百一 ちのよ有給と替付振

百二 ちのよ末の五と付此松廻よとる句

百三 詩の付此と付極く事

百四 ちの付句の付此と付此の付て付句の別の

句の事 百五 米句と付て付様

百六 ちの付句の付此と付此の付て付句

百七 人ほりと付句草本れとめて付句

百八 五文字と付句運用の事

百九 ちの付句の付此と付此の付て付句

百十 大さちの付句の付此と付此の付て付句

百十一 ちの付句の付此と付此の付て付句

百十二 ちの付句の付此と付此の付て付句

百十三 ちの付句の付此と付此の付て付句

百十四 ちの付句の付此と付此の付て付句

百十五 ちの付句の付此と付此の付て付句

百十六 ちの付句の付此と付此の付て付句

百八 細はなめりなしてふ付る句

百七 わらきと云ふ付る句

百六 ちる他は半あつたあどよ付る句

百五 ちるくといふとちかた半は付る句

百四 ちるあをまは字は有る半 百三 ちるあはれやふ付る句

百三 付る句の半字用ようはれはちるあはれにちる句

百二 ちるあをまは付換百九 ちるあはれにちる半的と付る句

百一 ちるあをまはちるあはれにちる句

百六 ちるあはれにちるあはれにちる句

百七 ちるあはれにちるあはれにちるあはれにちる句

ちるあはれにちる句

百八 ちるあはれにちるあはれにちるあはれにちる句

百九 ちるあはれにちるあはれにちるあはれにちる句

百十 付るあはれにちるあはれにちるあはれにちる句

百一 景気よまをちるあはれにちる句

百二 ちるあはれにちるあはれにちるあはれにちる句

百三三ふとびて付ふ事 百三四みぎひてふをとし

百三五羽をうらふ事 百三六後乃之羽付振

百三七しとよ付振 百三八しとよめぬ付振

百三九そとふ付振 百四十とよふて付白

百四一いせんよらまき付振 百四二物をこふにふて付白

百四三同志ふて付白 百四四そとふ羽付白

百四五うとふ羽付白

百四六羽付白 百四七もろふ羽付白

百四八ていふふ付ふ事 百四九ふらふ付ふ事

百五十ふらふ付ふ事 百五十一名鳥ふらふ付振

百五十二ふらふ付白 百五十三小ぬぐひ

百五十四ふらふ付白 百五十五付白

百五十六ふらふ付振 百五十七ふらふ付振

百五十八ふらふ付振 百五十九ふらふ付振

百六十ふらふ付振 百六十一ふらふ付白

百六十二ふらふ付振 百六十三ふらふ付振



百字四もあつた付様 百字五ふとふと字と九あり

百字六なりなりは付様 百字七ころまはつとも

百字八ふとふと字付様 百字九そとふと字付様

百字十ふとふと下五文字と下はふとふとふと付様

百字十一成なりふとふとふと付様

百字十二ふとふとふと付向百字十三あつた付様

百字十四ふとふとふと付向百字十五ふとふと付様

百字十六同ふとふと付向百字十七ふとふと付向

百字十八いふとふと付様 百字十九ふとふと付様

百字二十川邊附 百字二十一ふとふと付様

百字二十二ふとふと付向 百字二十三あつた付様

百字二十四ふとふと付向ふとふとふとふと付向

ふとふとふとふと付向

百字二十五ふとふと付向百字二十六あつた付様

百字二十七あつた付向ふとふと付向

百字二十八景気とふと付向百字二十九ふと付向

百九十廻の巻目

百九十一名所を付く事

百九十二回を隔るる所を以て百九十三回と名付し其の巻目

百九十四日と付る事

百九十六年と付る事

百九十八本説の旨を採り 百九十九本説の旨を採り

二百 廻を以て終る事 二百一 本巻の旨を以て終る事

二百二 本巻の旨を以て終る事

二百三 本巻の旨を以て終る事

し付る事

二百四 人の多く知る事

二百五 本巻の旨を以て終る事

二百六 本巻の旨を以て終る事

二百七 本巻の旨を以て終る事

二百八 本巻の旨を以て終る事

二百九 本巻の旨を以て終る事

二百十 本巻の旨を以て終る事

二百十二名通難談之事 七ヶ條

二百十三執筆法様  
良基の叔奇は呼ぶと云く  
九ヶ條

二百十四會席心得考り

連歌の起

一

一まおれ起と初めらん天のうき橋の夷奇  
こわすかりら連奇の地神の翁にわがうま  
しよえやうましゆとめよわのぬと有  
よめ神の神もてのそほりくわをいれ  
わえやう神しゆとこにわのぬわ付あえ  
この句れ一字もむりくずみしゆのゆえ  
うづびなも連奇なり其後系行天自亮

御代は日本武りきりあがりのあまの夷志のめよ  
向ひききまのいほくどとて甲斐國酒折乃  
まよやまのいほくどとて甲斐國酒折乃  
のほくどとていらくあねぬる火ととて  
まよやまのいほくどとて甲斐國酒折乃  
十日とて甲斐國酒折乃  
とて甲斐國酒折乃  
りかんの水をせまらして甲斐國酒折乃

危付ていらくあねぬる火ととて  
まよやまのいほくどとて甲斐國酒折乃  
一白のいらひ控をうそ甲斐國酒折乃  
どいなる事にかうりきりあがりのあまの夷志  
らりあがるあまの夷志のあまの夷志  
まよやまのいほくどとて甲斐國酒折乃  
百韻をもいほくどとて甲斐國酒折乃  
まよやまのいほくどとて甲斐國酒折乃



多の事し〜とて海にたれ〜とて  
わき〜ばとて〜てあるもや  
と道生寐思生を〜もけく毘沙門  
を〜の意をり〜毎に連飲〜  
ゆり〜のら〜を待てる  
地下れ好を〜なり侍りし母〜長  
の〜せわ〜とて捨ふ〜えゆり  
〜比の先を〜とて阿法師ありん

つがに覚信照救済 阿が〜其後貞治  
慈安の比〜の救済法師 光道は聖之  
又〜の法師 素眼を〜てやむ  
〜の比〜の焼灯庵主のたれ〜火  
と〜の比海店の除道場〜相の  
〜の〜を〜ゆり〜と  
〜の比〜の世は〜の宗砌

法師智蘊を以てあはれに清忠和尚の下に  
ひきこく作てあはれと志ねるその所  
道釈のきえあふとあらはれみえしうまよ  
且心致悪措初地專頂能阿賢盛を  
ぞし遠者あまのつらり宗祇の宗初心致を  
よれ乃と學子ししえしなり宗長宗願宗  
牧宗養紹巴をぞうまのぎまじし

連釈教旨古用意事

一或ふて之の所とれい様も教旨とせ  
まそひのぬしゆるまきや善て之人情まよ  
あつも其た人侍るし孟子といふ書より  
生徒の情のよむ抱ふがなりなりと事よ  
あわれまはれなりなるもの荀子といふ  
又中は生徒の性よりまき抱おれも學子  
向ふてやうくあつてもいふ揚子といふ文に





おぼやかりの白くも青くもとちゆるまき  
らぬいもふらうしき花をたかりてしと勿論  
うはひのたふりもたつたつらうの連音れ  
はまのたふりもたつたつらうの連音れ  
白くもふらうのたつたつらうの連音れ  
あこめせとよよの田んぼに水たしををみ  
うきに情なちうくくつたつたつらうの連音れ  
たりとよちたつたつらうの連音れ

はらうらぬわだんまにたつたつらうの連音れ  
とてわらうのたつたつらうの連音れ  
なとらふ花のたつたつらうの連音れ  
うらうのたつたつらうの連音れ  
よちたつたつらうの連音れ  
花のたつたつらうの連音れ  
とちたつたつらうの連音れ  
りまら我の成ぬまれ昔難波の三位入道殿



おまじりていそむりかきし地をたぎ  
ぬへはあつらへし事なむの  
あまのこころをいかに  
あを初やうくちかきこころを  
こころの海はんとあふけぬり  
いよ沈思をいよいそむり  
おまじりていそむりかきし地  
おまじりていそむりかきし地

と海は素道のまことと  
わらふ事なむのこころを  
かたつらむりかきし地  
事いそむりかきし地  
いよ沈思をいよいそむり  
あまのこころをいかに  
あを初やうくちかきこころ  
こころの海はんとあふけぬり  
いよ沈思をいよいそむり  
おまじりていそむりかきし地  
おまじりていそむりかきし地

六義之事

一六義之事一六義之事の如きは、  
古今集のうゑを京極黄門の所説たるに  
義の根本は毛詩より半やわらうしく其  
たよみひとんよるやうそまじり常よ  
糸句とはかきとに花は落葉とていふ如き相  
似し一々秋意後かたに方為格愛とてか  
し一風賦比興雅頌と六義とていふこと

や好まのいさう一を今教は篇目表一深秘に  
かひとてはよはれ半よあん  
才一風

ハ雲の御抄も白風といふ奇の物を物よよ  
そてとらふそ宗養の云ふよといひ目し見  
るい子使とて

名の高くおもひとめ一郭

くらん致使都の二條の大岡様と称揚と  
まひ一糸句と

後遠ぶ去きて霞かふ二葉うら  
木わりの霞のふまふ小雲か

才二賦

病をみて花の秋まの暮も如  
にやらの庭の木の葉は音も如

遠よりゆるやかにしるしの雪

いそは抄の五賦がうそ奇しくも致後都れ  
えおどるんをさかごりてがよりしゆん  
宗養のゆき一篇よりゆぬ美とん

いばらぎのこころをぬれんむも如

雲のふりそを秋の山路の如

ねくや雪霞のうらふ事一は雲

才三比

雲のたよりをゆるも此の如

すくさらのり松の葉も岩根の如

いそは抄の五賦の如くも奇しくも致後都れ  
ら入るるも東極美門の如くも如

見ゆゆのこころを美とんが

遠のき袖を下あつたは人の如

笑りの色松が葉の末も如

まの葉もゆるふ極の下涼の如

才四具

下お葉地りや雨しつる交結る

いさしきと真のまへに奇しくも娘のく舞  
ゆふたは人真のまへに多しとてい

又やらんまじりおあつりあはれん

まはとわいのまよらわら柳

面鏡のむが地くくはなとあす

月やと釣いふことおまらわらんと

みりつ雷け柳や歌ののど

いせしとて雅いあまのうき系極意門を  
つと海りく雅いゆりあまのうきとてい

才五雅

始りり終りりまていりりりりり

家紙日雅い賦いあまのうきと

賦いぬの若意とあまのうきと雅いぬとあ

まのうきとあまのうきと

毒がまよるまじりりりりりりり

つらまじりりりりりりりりりり

明やまじりりりりりりりりりり

つらと釣月と末葉の秋を露

夏草も花の秋めは成よまじり



た う けい や けい けい けい けい

雨にそいのうらみ花送と成よの程  
花のえもかくある地が夏木立  
らふとぞいそぬ世のいかんきう  
都らやい物にたさよ雨く  
おやとの花の葉れ釣みほひ  
雨が花あわてひのそれ物ごら  
花のうらみそ子入志笑のめ  
雪よりと葉のゆもあむ夏け道

いさ けい けい けい けい けい けい

二葉よりあはよ本もいと毒法至  
長月いぞすまのいれみふす  
月いよあは下害のまき雨  
此の葉とまよふりいごあうえん  
空もあわらわらうまのた  
梅づとあはひをさる胡ふす  
咲いらうとらりけいけい菊の花  
霜とゆる雪あといく世うあし和



維  
の  
ぬ  
と  
一

上

け  
せ  
き  
か  
ま  
て  
か  
へ

れうぬらうの花月夜わきま  
花のしる青葉にまじれたる  
雷は花を紫よならぬ雲は風  
一色にさしぬるの心はゆきま  
一かたよとぬらうと 都  
素  
よもゆらうと 今も雲をくわ雲は雷  
下知  
深うぞふたりの木はりのまはわめ

ゆきま花をくわ雲は雷は風  
深うぞふたりの木はりのまはわめ  
ゆきま花をくわ雲は雷は風  
名もあはぬ花も言はれ本は壊れ  
世はゆらうとぬらうとぬらうと  
白ひもてらぬ袖もく雪の梅  
さぬらうとふた花とまはる雲  
花とみどろとゆらうと筆の雪

わ

一 <sup>才七</sup> 子字

梅がよとゆふと暮るゝか初あ

りあうまは月あうとさおけん

松たけんかや雷に露うん

右しうやう分別有く二段切九

一 <sup>才六</sup> とゆり

みとゆりうんまはうまはうんま

雲月もがみりぞぬ妹を秋のあ

一 <sup>才七</sup> 大まり

わがとくやまはみかく玉津鴻

雲うぬ凡のゆゆく秋ま月

わがとくやまはみかく玉津鴻

一 <sup>才八</sup> 三後切

丹月あはれゆき凡谷法水

花の細柳の髪とさけの凡

一 <sup>才九</sup> 三字切

花もふれやとらん友の庭

むかひふらうん 移る雲は雷

一 <sup>才十</sup> 二字切

折人の花もうん凡もあ

花や川に袖あふ本流の家

一 <sup>才五</sup> 面よ切字なくてきうく兼句



五文字あり故よびとあり

一ふとあふふり事

ふい雪木紫眼にあわ

けはるあふり事

板るあふり荒る若れ淋しきふもあふり月と

こはあふりあふり月とあふり事

板るあふり月とあふり事

見よあふり事

一<sup>五</sup>半ぬふりぬ事

松よぬの字り下にふの字れ  
うひてやゆら半ぬ事り  
ふりまればぬふのぬ

雷の花青葉にありぬあふり凡

ふれ半ぬあふりぬ事

省とまてあふりぬ事

あわじぬあふりぬ事

いひぬあふりぬ事

ふあふりぬ事

半づり溜みおれおぼくけいで  
おれお字よりけいききさなるま  
まへくまきさうりよくこのれと味し  
一 <sup>五</sup> 歳句の事

おれお大事一唯茶句よてゆえの茶句わ  
きわと一産きおあが親さわく徳能者老小  
ゆけりて末唯神妙有く一よまき歳文  
まのおれさつねと純しき又ゆりじい

ふとくたつおれおれゆえのゆえのまよとく  
おれお茶句よまきさうりゆきんまことりり  
おれおくまきさうりゆきんまことりり  
うまおんいさうりまきさうり  
おれお茶句いさかたやうまゆりる相親  
うまおんいさかたやうまゆりる相親

又二條実白道平云  
九色にはほりわとゆり一色に雪

かどせと勢多ひゆるしう首の秀造るは  
しきれ今のち紙さわう首大やうにせ  
物の中古風詞

衣代と終ん妻やう海の星表着  
高柳もけさやあついとさるけしき  
雪に毒又がらわが井の目新し  
舟のぬよ浪るす好のわやめい  
すあそと康の音遠ぶ川田のね

あよひとい月と名好まをきりや  
こがしつこのの葉いよ旅の雲  
うの雪や花りま紫よ庭の松

又中古風世の句

梅や咲花のさりんよ代もまま  
もとのけけの雪るけ若菜は  
花をまやまのやんらん旅の松  
手打ぐま花よ木はよんか

人よさるゝお人もふくまきす

ふむむち月も釣はな一なり

月つひら報ちくすよと長る

行ぬらわやなりあむじこなり

らわらうらゝ此凡神あらんゝいぬる堪能

と高座の百韻をどかた共あましくせ同歌をた

かふよさるゝ一の神もて修るゝ公とゆくまん

ことさたふとちさ地とあむゝさむらひ

高座の百韻の発句いさゝ高座のり人まきしやわ

昼は発句も子細ありやせや

一 眼を事

半松奇の抄およそ眼の発句よとていして因部

とあぐんとすゝゝやゝゝゝ又云眼の発句よゝゝ

うひて句やゝゝゝゝたぐくおのゝゝゝ何れも一や

よしてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

本歌のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

と云て奇巧末のほしきものやうに成り  
一ふれどもとてあつたはらへしむるは  
きん服の句は年々めいめいけしむる

あつたはらへしむるは

卯の花や雪雪や卯の花

足は對し付あつた

あつたはらへしむるは

芝生のくれの秋の風

たゞ一紙を我と見えあつたを句をわく  
うたはとく對句にみえあつた也

述懐の句は独吟あつたは服も同種にあり  
他人付あつたは後句は地衣とつゆあつた

あつたはらへしむるは

北夜句系紙猪行のあつたは  
お終ひはけしむるは

あつたはらへしむるは



まゝに野山を去るのわらわら

やあ懐の心を捨て花はあきらましくはなされ  
し又族扱表養句のわらわらよころろ  
ぬ所族扱也

待らば花よおぬまよ今朝の雪

こふ長楽園とらと海舟とに西三條殿わら  
とらと一し一服よ

とらと遠くはくはくはくはくはく

わらわら言まのふら取あきらましくはなされ

わらわら一対付ニ打派三ちび付四公付み此角

一<sup>十七</sup>矛三之事 并 面八句付十一句めど之事

矛三ハ脇乃句よよく付くもくも希たりき

とわらととり系族扱吟

移らば花よみらじり夕霞

橋がうらわら山を去るの月

去涼を林簾の里よ待ありて

又兼我独吟

きくえゆるうらむと白きと山嵐の雪

花まゆのふよむじよ杉とてうき

まの目ゆかのめく梢鳥啼て

ゆひ芽三よそ可寄みか別み花ゆかぬの才三

よそとあへくゆよそてい式よかよひゆさく

田ゆめい招のゆとらふさもそてつうくと付

よのゆちちりよもいありのありのあやせ

いひかゝり一不惑い

五のゆは才三のゆをゆきぶらりあもたなくあ

一兼ゆか苗芽三らんあうと五のゆはてあ

芽にてあうと五のゆらんああふ

七のゆは五のゆよもゆかるとやとくと山系風情

よそかゝるぶら

八のゆは羽よはまりの故行とねくとつらくと

幽玄神とて付くと八のゆありのあやふ

丸のめい珠は潤つまりゆく物よりあるはよき  
於葉よりとらむりては付くゆりれう  
懐きうはりてる句がまじあそくは横  
か

十一句より心をちがく一葉肝要也

二の折よりはりてる心をちがく比文とま

てもく一二の表三の面うめあて流思

五のめくを希る一又四の折よりはりて

かりきとりてく一折の表面ともり

末一あむりてく一よきあむり

りんとて面とせりる毎をくれ茶句うあ

はよあはれを付く必二句あはれら付あ

まをい先く懐きうはりめ二三句あはれと

うまやとく付む其内よとひよりひ句あ

らうとれあて一姉一はくが連歌もくあ

うなる物よとくあわはれは得肝要

二九の句

かのも成な月ありと傍

小夜衣わりのまうもてうのうたよ

雪の入り日はゆるふやまると

花をえておむらあや残るらん

夕日く残る山水かまは清

村とどけ煙一とらうらあひさ

二九  
毎返の句

ふもかこぬをまの原

道づこは胡弓の霜まのきえて

虫の音も有りなきうの秋とま

長秋の傍は林風が吹

三〇  
三の折の句

何とらうこきんゆきさくら

をさる高根さうわと雲けぬて

松の下葉の林表白あ

文りて凍ふかくれも月院て

雪井よありぬきづの鳴る

五の里ゆき都きまゝのし

埋火も寝きえやぬ老の床

春山やぶる意のしゆき

力をいさめたり受法ま凡

鳥よぬる板床を起出て

しりくちぢるるのぶり葉

青柳より陰踏人形泣みくし

朽いそそぐ風漱々の埋木

水こゆる根の柳のやを絶て

あつとふもうこ世ありの事り

かくも家とせうらよりこめらや

月もたれおぐひりありの事

露ひよふ花の志くし玉はは死

一五音之事

わら やま はか たさ か 牙音  
 ゐり いこ ひに りし 歯音  
 うる ゆむ ふぬ つす く 唇音  
 えれ えろ へぬ てせ け 舌音  
 ねろ よと ほの とろ こと 喉音

一 三 子亦龍葉の得陳

紹巴の云下子れは親のそらうび烟もきして流  
 うすよもておをどをいもよくとひ子細かく実  
 んたり流きしよしくん得て劫女有きうは

一 三 やの字七の味牙

は相乃や 又やん卷う世乃花わんもえん  
いやいあわいれらき切字も用まふはらんこある  
 とまたのちうていともおともあうし

申乃や 多のいふ中乃霞よ目念のりて

いやい物をとぬるの ちあふんし まを枯くき  
りよりうりる也

花や

のくしともおちるべーふんあひまわ

段のわ

あふぢや 特事までゆきしん

いやより方附れていふもと申す  
花やまらん 秋やとくらん 皆枯れし  
みづうのし 枯るやわり 細かやちらと  
ことやのぬき

このや

今ふもやせりー 一月よもきりし

たふたや

ちふやとまきれもふんしうひし

かや

ちるはちやうりしあしあふん

いやいよとーいふもと申す

おんちもあて 勅弁とふーふんあひまわ

こあふんし 押入字あていふもと申す

あふぢや 特事までゆきしん

かふぢや 特事までゆきしん

もふぢや 特事までゆきしん

四月 ち中三月と九月と

一てあふまーりしあふんしあふんし

とら駒をたしてはなはたかきしるはなはなは  
風しよらりてしるはな

いつ 去日せつらつら都れ家よもて

らまき いらもいりびまひるよ南のあて

らごも 改卿いらつら首れねらひて

ちうぶらひら字かきいりいも黒茶よまらあま

いしよららあま改よていしよらら

一<sup>五</sup>下は白うてあらかうすあてとよのりひるひ

ていもあしぬとんじ

蟬の林し花もつらりて

初ふゆ海花にわかくし

一<sup>六</sup>たがのいよつと字とよりかていしよらら

ありつらしは終もごう字あていしよらら

いもりち

う ちまきあがらつらよ洞よ世と捨て

う 里人あていあらかいあまらて



よ 又いかにんごほりのたて

一千七中してゐり乃押入字

を 風もねき秋とねはれ袖とらふて

ハ 又よとの情の後志もさうりあて

と 月とんご無りる今き音りて

も 淋しきもさきく川原志は嵐に

る 意しきよもなをりぬ余りて

は 嵐は花の夕乃あふみと

又二句は中と二所あて抱る家らもらり

山里の花乃るゆにけし世とて

人重しむとむかふ余りて

らわらむ句をよきまらむゆりあふと

まればはさのあてこりあまらり

静まて 春うまて ぬわん

をまて ちやうあて うん

らわらむ句をよきまらむゆりあふと

しず

一六  
よらありよとま現在未来の神

とま 人づねよめか〜

ら〜とまかろ〜

現在 かくて家根〜

是の現在めてよと〜

きも〜

是の苗唄の中〜

又下知の詞〜

い〜

昔あ〜

こま〜

〜

〜

下るよ け者よ

西の目よ 霞目よ

うらうら

一壳 下れるよあ

洞の紐一糸の海くし

おぬきくぬきおぬきくぬき

一平 一はくありきおぬきくぬき

田まの浦よおぬきくぬきくぬき

多の浦の糸気ねの海くし

乃高根の雲の海くし

一<sup>ホ</sup>も前り乃押(字) 昔の才三の言をしる

う 山乃くづきよぬきくぬき

く 山乃く遠く糸の海くし

す 糸乃一糸を漕かす

つ 木をきくぬきくぬき

ぬ 浦風うらうらぬきくぬき

ふ みぎらねくぬきくぬき

じ 水まらるばる魚の海くし



糸の結ぶり

それうねれたよまほろ、糸  
道はまじらう、いふまじらえ

なれらめて可ら得也

一らんさありか事 まこれ糸の結ぶり

らみまらておなとらんとうごうらんか

かかかかおよおどおどらり

かよかきかきかきかき

かきかきかきかき

あーくきくきくきくきくきく

すいたま

らぞ かきかきかきかき 妹の書

かきかき かきかきかきかき

かき かきかきかきかき

かき かきかきかきかき

かき かきかきかきかき





ゆ けりわをまゝの西乳がまゝ  
ろ ねはは一人づつあつた  
ぶ 中へはまもつとあつた  
け 又字トトもあつた  
ま けいあつた  
ま けいあつた  
ま けいあつた  
ま けいあつた

かゝ夜目もあつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた



一 *Handwritten text in Kuzushiji script, starting with a circled character.*

一 *Handwritten characters, possibly '風' and '色'.*

一 *Handwritten characters, possibly '鳥' and 'さ'.*

一 *Handwritten text in Kuzushiji script, consisting of several lines.*

一 *Handwritten text in Kuzushiji script, starting with a circled character.*

一 *Handwritten text in Kuzushiji script, starting with a circled character.*

一 *Handwritten characters, possibly 'は' and 'も'.*

一 *Handwritten characters, possibly 'い' and 'ら'.*

一 *Handwritten text in Kuzushiji script, starting with a circled character.*

一 *Handwritten characters, possibly 'ま' and 'の'.*

一 *Handwritten characters, possibly '甲' and 'じ'.*

一 *Handwritten text in Kuzushiji script, starting with a circled character.*

一 <sup>里三</sup> かのきひ又并地又

又啼一や標を志ぬく鹿の夢

地又

又もんぬ報とどくどちこりちて

一 <sup>里五</sup> ぬとあふらうらとあふ一ちあふていへんあふあふ

いづーたふと

あふくあふ日があふらうらとあふあふ

極郵一庭の蔭の蔭の蔭の蔭の蔭

是のたあふらうらとあふらうらとあふらうらとあふらうらと

一 <sup>里五</sup> こはあふていへん一

一 <sup>里五</sup> 現在の一文字とていへんあふらうらとあふらうらと

里遠一あふはあふあふあふあふ

ふきさ一花ゆふのあふらうらとあふらうらと

こあふらうらとあふらうらとあふらうらとあふらうらと

あふはあふあふあふ

あふらうらとあふらうらとあふらうらとあふらうらと

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

甲六  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

甲一

甲一



かきつばたのうらみ  
つらきうらみ  
つらきうらみ

つらきうらみ  
つらきうらみ  
つらきうらみ

梅の花

つらきうらみ

つらきうらみ  
つらきうらみ  
つらきうらみ

つらきうらみ  
つらきうらみ  
つらきうらみ

つらきうらみ

つらきうらみ  
つらきうらみ  
つらきうらみ

つらきうらみ

つらきうらみ

つらきうらみ

つらきうらみ

あきふらふあきふらふ

秋の夕のづかみ

あはれは神のまはるる

一 卒六

結果の中もふらさす

あはれは神のまはるる

一 卒七

あはれは神のまはるる

あはれは神のまはるる

あはれは神のまはるる

あはれは神のまはるる

一 卒九

あはれは神のまはるる

あはれは神のまはるる

一 卒十

あはれは神のまはるる

1010

わうわうと響きつらしてはく——先達の  
白と味くくたるべし

七十三  
一五音連性之事

咲花をまらりて本と濃美さうり  
ゆく花とらんと岩根の極特  
雲雨のあふ木の枝の花さうで  
れ白の冠より踏まて音のま聲とらんを  
う——とん得ゆらん——且もあはれと何れだ

人園白のりるま斗きう——侍あ也

七十三  
一音まら連音之事

衣うの浅芽が原より里ありて  
衣うの浅芽をいけうべんけいを

衣うの里の浅芽よりうのりて

とほのまのりて可然い

七十四  
一同神病

ねくまら花をまらうのさうり

一不冠者キヌ

あゝあつとりく袖いなるぬきて

この句はとけぬり用ありこれ級母のひり

きずとり侍り

一不禱着キヌ

世の中はうき世はあつてもあつても

けるに中用ありうき世はあつてもあつても

ておあり

一番もつて

あゝあつとりくもあつてもあつても

この句は下考五文字叶ぬて来てもつて

中とよせいのきをまね下りなり用あり

皆うつれとよ

一修り字の句

本末これあゝぬあゝ花さき

此句はつとよつてあゝ字にまらして用あり



七十九  
一五なきさの

ふみかきとて深きとせよとて

此のいなきを記しこれよなきをいとしつる月を

もいめて色なきとてもつる一ノ下手に此のいと

一ノ下手にいよなき事

何れありて新わさる人

あつた白の敷つても無一かありてその

あつた白の敷つても無一かありてその

人といひぬらぬしぬゆひよありてこの世に

道とつたより交い下地准々  
一五なき事

松を起して田をまわぬ

初株をふいつつともみりて

右のつゆのどけをまらふみどりれ也也

付白同えよとて

林よきくつなきふらぬ

みち龍峯の庵やうかつん

かむ龍峯の庵はうららかにそを記ふと  
はそこの故の峰はうららかにそを記ふと  
うららかに故の峰はうららかにそを記ふと  
しそを記ふとそを記ふと

全  
二句一かどの詞有也

すいふ種をいばくあらん

こゝに酒より永路の浦に日暮る

これ大排の付やあつと又

けり方もあつぬ本舟は独りして

おと付くはあつぬさすい殊に詩の心は

うまひの夜半鐘聲に到る名船やあつぬ

いつの浪りわあつぬ

手あつぬ我世の中とあつぬ

これ大排の付や

山もあつぬしそを記ふと

と付くわあ〜くわりの海へ

さしぬきおれ何志のあん

化ちわと命に心いふふれあ

又

まゝいともあは命はけいぬまのあ

めはねね〜らり命をれもんわらりてあ

あろ〜いよら〜いををああ〜

半三  
一佐白身縁成事

新事りてうかるとら〜あふ

深塩く〜てうか〜海りうん

作と〜もろ〜かたなる田と〜て

是よ〜うか〜とら〜あ〜

〜か〜ぬ〜や〜ら〜守海士人

萩とら〜てや〜ら〜あ〜ん

賊〜ら〜が〜ま〜か〜れ〜お〜よ〜回〜と〜尋〜ん

あ〜あ〜ら〜あ〜の〜神〜と〜ら〜い〜き〜ら〜ら〜あ〜あ〜

PL

益  
一依人不認合句の事

いぬしれね思つて老るきそ

長年つねづめが昔なりしき

老てお後の事もさうなせん

ついでに句ども痛回概よめしめてお家あは

殊よいありふりゆく心得入ま

八十四  
一依人の句の事

大田や平井の月とよみちのめし

まじりぬは幸の場よゆらりて

能句ども作者よき人々

わらうこゝろん教諭のんから

學ひえよらりてきよまの道

是に比興

一依人の句の事

うみすことひはるしきよま

家とや人はあひつらん

ふいふぬきの中きよらむと母のこころ  
あはれとて別れをせむし侍書  
よき年を歌ふたのちよき年を歌ふ  
色くはあはれをばはるくはあはれをばはる  
一函懐き句少中意事

男の持りて世に誰り強ふらん  
老う人れらそらん  
人いまは持りて世に強ふらん

ふれりて函懐き句少中意事

あはれとて別れをせむし侍書

よき年を歌ふたのちよき年を歌ふ

ふれりて函懐き句少中意事  
男とらや持せよそらん  
あはれとて別れをせむし侍書  
わが守老う人れらそらん  
一隊の二五三四老事

あしはらむにむらさき

ふり遠きまもふに書かんと

夕暮鐘しりらふとく

足お二ふりうとてあまの白雲ありあけ

あしはらむにむらさき

ふり遠きまもふに書かんと

夕暮鐘しりらふとく

あしはらむにむらさき

用ひあり

一文字修りのはなまらしてあしはらむ

余り様よらしてらるるのすは傳はく

五文字とあまのむらさきとてうしせ

字とあまのむらさきとてうしせ

あしはらむにむらさき

あしはらむにむらさき

あしはらむにむらさき

かゝるものほかにあつては、  
此字二十六字のりちるものなるが  
しよし格とて文字のあまのり  
別々の中つてあまのりちるものなる  
一白の文字の類中七文字の類あるは文字の  
是れをいふものなりとて、  
まゝのりちるものなりとて、  
かゝるものほかにあつては、  
此字二十六字のりちるものなるが  
しよし格とて文字のあまのり  
別々の中つてあまのりちるものなる  
一白の文字の類中七文字の類あるは文字の  
是れをいふものなりとて、  
まゝのりちるものなりとて、  
かゝるものほかにあつては、  
此字二十六字のりちるものなるが  
しよし格とて文字のあまのり  
別々の中つてあまのりちるものなる  
一白の文字の類中七文字の類あるは文字の  
是れをいふものなりとて、  
まゝのりちるものなりとて、





胡乃雪に注ととてや

糸  
らぬきさうしぬれさうしぬれ

一皮肉骨之之辨

人とも家ともは殊なるあり

皮  
荻束や隣も凡のうたへ

らじむもさにも袖あぬえ

肉  
尾花咲野も此花乃母とて

水もくさる細なりきり

骨  
地事ふじかき能き以辨と云きうて

一十林之事

私云十辨の中よりさあしく云辨  
ありてもきてる辨成へ

骨一函云辨 付仍雪 四雪

出云辨は越林の雪を四雪の別と成へ

出云の辨は越林の雪を四雪の別と成へ

わいひ雪雪の凡のうたへ

羽の雪は面新のうたへ

四雪の辨とやいふもさうや

洞りらわしも物志肉

洞路の長いのそりさうしぬれ

りし我

うらな持まといふこと

かきつゝあはれなる心

月をづらある長年の心

廻る我

と所ある物よとあはれす我

わづらある人まはれす昔も

青女よともむねのよみわづら

才二長高我付

高山 遠自 澄海

えきある去世我は生るる口しき

霞よこころ花の面影

まはれもたれりとも色見にて

高山作

くはれは縁もはれ也

不考の火の甚きもとて死行末

美業焼たやりにし人

性よとあはれ

気あるまはれ量人性あるんは古

月志ある人まはれ

遠自体

澄海神 唐河やあめ推くる 煉志水  
ひとあし月とさるうらひの鏡

岸うりのの枕ゆりもや

空乃り水のまぢり月とさる

才三有の神 付 拙名 不明 至極 理世 按氏

乞ふ御云喜んをゆりてとてさる  
ひひとさるあしとさるあし

又さ有の神とりの至極とあし

物とびもさるまはれ胡家

起ぬけくもさるあしとさるあし

物とび

急と照さるる月遠よひく

湯わさるとを巻よ巻換く

不明体

さもいかなさるあしとさるあし

即しおのひもあしとさるあし

乞ふあしとさるあしとさるあし  
会て調あしとさるあしとさるあし

至極体

志の地もあつた所はくも備中  
の地もあつた人だといふ

志の地もあつた所はくも備中

志の地もあつた所はくも備中

理世辨

志の地もあつた所はくも備中

志の地もあつた所はくも備中

志の地もあつた所はくも備中

松氏体

志の地もあつた所はくも備中

志の地もあつた所はくも備中

志の地もあつた所はくも備中

志の地もあつた所はくも備中

志の地もあつた所はくも備中

志の地もあつた所はくも備中

存直辨

志の地もあつた所はくも備中

後しこと老ふる余をうへて

花麗仲

玉とみかき心いかりけり

浅芽生や秋乃白前月院へ

松辨

ころもさらぬ辨

浅るれきより胸よりこり

いばくわうみかき心いかり

竹辨

まゆまかゆきし心まゆ

山乃らうりくまゆも遠く

まゆの繁るはこりゆき

才五事可然辨付秀逸辨 振群辨 字古辨

まゆの店と人ものこり

まゆのこりこりこりこり

秀逸辨

遠くこりこりこりこり

まゆのこりこりこりこり

祓群狝

うらやまのらと付る事

侍とさしまひのうらやま

郭とすぬ一板のうらやま

寫古狝

うらやまのらと付る事

今よ板とのうらやま

江とさし目おはのうらやま

才六面白豚付一真狝 景曲狝

うらやまのらと付る事

花乃とれおはのうらやま

一真狝

うらやまのらと付る事

かたむねの一村すき一の雲

系世狝

かたむねのうらやま

是らうらやまのうらやま

才七濃狝

おのりくふも枕を月  
とく物とてしき為病やうそ

才八見様神

初わく晴乃子に結きて  
思色多し此極乃一ひし

才九一節有神

後志しうふはうきと若く  
同く本り初めとまにばあへ

才十拉鬼躰付強力神

青き赤と行し一足乃志  
為座の形端乃雲下り影

強力神

大かたにめぞも物しと一節  
うまは凡も老やあひや

一親在白跡白志

親白とけ初志きくみどりしとあひ





六切連歌

田舎の啼き声もよそよそしく  
千原の春風もよそよそしく

七吳歌通對

はるかにをるもよそよそしく  
物よふ春乃枝野の啼き声

八

うらやまの春風もよそよそしく

うらやまの春風もよそよそしく

うらやまの春風もよそよそしく

うらやまの春風もよそよそしく

うらやまの春風もよそよそしく

うらやまの春風もよそよそしく

うらやまの春風もよそよそしく

九

うらやまの春風もよそよそしく

くまの煉煮ゆるる袖のあ

じよぶ整りのまよしとせ

右御を男に寝ねる子枕

袖のあひのあま枕しよとけはる

百  
一き焼か手あをを

道志くハ新志友よ申て志り

兼の戸明てふみえまら

百  
一あひのあまを枕して付換

梅らりのあまの杉あ山里

独るれゆくあてしつ凡

海よりうるあまのつ凡

まき目のあまのあまのあ

虎をけくつあまの日の新

山をくせよあまのあまのあ

一あひのあまのあまのあまのあ

あまのあまのあまのあ

あはれおのころのあはれ

あはれおのころのあはれ

あはれおのころのあはれ

あはれおのころのあはれ

一首の對句をく付句

あはれおのころのあはれ

あはれおのころのあはれ

あはれおのころのあはれ

あはれおのころのあはれ

あはれおのころのあはれ

別

あはれおのころのあはれ

あはれおのころのあはれ

あはれおのころのあはれ

あはれおのころのあはれ

あはれおのころのあはれ

梅の葉のつゝはちか月と袖として  
あるよ「わをわ」と移るは一句の梅の  
よ花の月と袖とせしむる

つゝあはれはつゝはつゝ

仲中つゝはつゝはつゝ

川合とつゝはつゝはつゝ

あつゝはつゝはつゝ

つゝはつゝはつゝ

家のちもあつゝ

一<sup>直五</sup>あつゝを返して付録

なを柄つゝはつゝ

ち山路をききつゝ

残りてうゑの海さう

梅の葉のつゝはつゝ

一<sup>百六</sup>茶臼へはつゝはつゝ

付白

とよむじくや古卿乃妹

秋しゆりより整りそあらん

秋めんゆりゆきうきあは

りの月しるをまねく

舞うすし妻とよ世道やあは

あふし世と接いあもねく

ありこの世の洞よかたあは

うりあし妻とよ麻がゆり

きうび息えいん

驚けなくおもたうてゆ

あふえけあぐくともきうず

号りすくとも花のまどろ

禽獣のあふよととんれ

あしぬる啼し雪かき

そこのかた荒乃道はゆ

曇りあひいん

あつらひのまじりてはるの栞ねそ

一頁  
一五文字と付句と用ひし句

あつらひのまじりてはるの栞ねそ

夕け雪にじりふ遠やう

葵きやあつらひの栞ねそ

今朝玉霜り初れはし

朝の霞夕なれぬ電

山里の花の匂ひよもはる

一ちいさな物よあつらひの栞ねそ

せらぎの杖をさくらにまき

大海の遠くはるのあつらひ

とやまきりくもを袖まはり

あつらひの栞ねそ

一あつらひの栞ねそ

雪ふる月の新うすくはる

真山ろゑれはるのあつらひ

昔ふさしひがね名物ふ

菰のしらをきよめひ舎るこもゆえ

一丈皇のけ羅句付家様

佛法後とももいそあや

人のあや廻をあぶら浅きらん

もふ人佛は後とる人そんて何とて廻

とむにりしうとまん

おしもむらあもいそあや

お螢のえてはけをちりらん

崎しりける今うまがあは

別ぬも浪のらあは世とあつて

車は右よのましかりかこ

人ける馬場は白打時とだて

一皇ふきやうあははけりあまもも廻れ

越もてはせいも二句よむびていふかかると

是もあはれあはれあはれ

あつめぬ人よう死ははかして

恨のあやまちやうるらん

さきけちけしとらふ者うー

あつめぬ人よう死ははかして

恨のあやまちやうるらん

さきけちけしとらふ者うー

あつめぬ人よう死ははかして

恨のあやまちやうるらん

さきけちけしとらふ者うー

あつめぬ人よう死ははかして

恨のあやまちやうるらん

さきけちけしとらふ者うー

あつめぬ人よう死ははかして

恨のあやまちやうるらん

さきけちけしとらふ者うー

あつめぬ人よう死ははかして



けし江のあしきあやのこ入ゆらんゆきも  
一<sup>百三</sup>番のよかたつた物をこらへぬよ又別の物と  
さらけしをるる

志林志志をいづきかかひて  
水鶴なく夜を月やうた歌  
丁此よりいもいさかひつし  
むもあそらげりれ木乃るあそ  
身もあそらげりれ木乃るあそ

りくふ世と男は水た泡よあそ  
一<sup>百四</sup>番あまつねよいとけふら

独すしうとまのむしうも  
あそりつるさけらを見もみよ  
わさし梅う一かたにちる  
さよあそらとさそそむも夜とあそ  
さよあそらとさそそむも夜とあそ  
月影の花を宿りるまのあ

心もあはれ山月うめく

更わさ月の中をまねたらん

松風や山路付程を遠らん

あつさるゝ雲を人の心せり

百五  
一重初よみかたのこころ

あつさるゝ雲を人の心せり

人をも人懐くまよふ心せり

あつさるゝ雲を人の心せり

あつさるゝ雲を人の心せり

百六  
一初よみかたのこころ

あつさるゝ雲を人の心せり

あつさるゝ雲を人の心せり

あつさるゝ雲を人の心せり

あつさるゝ雲を人の心せり

あつさるゝ雲を人の心せり

あつさるゝ雲を人の心せり

百五

百七  
あつちのついでに懐かしの浪の音も付る事

末も遠くしてあつちのついで

さよふまでお茶をたぐりながら

わらわのついでにあつちのついで

地きりし物を越えたりゆく

ついでにのついでにさよふまで

さよふ花もついでにさよふまで

一頁  
あつちのついでに我とよ付のついで

さよふついでにさよふまで

水煙子江原の月に釣とりて

ついでにのついでにさよふまで

さよふついでにさよふまで

一頁  
あつちのついでにさよふまで

結露のついでにさよふまで

小初遊やのついでにさよふまで

ついでにのついでにさよふまで

二道よらうりて本もまね

くしつゝまゝにさあ

露れ雄震のまじり世

一尊てあふれ字は

音とあふれあふれ

雷理そは谷のあふれ

水つおまふをたて

我らしそりたれ

今宵月難と枕は

うらたのうた

まておのり

中夜月一月の出

秋文ねのり

一皇茶白たわの

けしや

蛭小船

おははしむる字に付てきく

七十四

ふつ洞や中まのあはん

色うつる秋志揚ふけり自叙

百五二  
一付句は又字用ひきくはむ曲二句はうらりか

とく事一

少はる少はる毎ておゆあ

まきに春法門違乃換少舟

本集ありゆふ山川はま

男麻鳴冬お前よ秋文て

百五三  
一お句お合く付極あり事一

強りてうまを向さるま志花

毒うけを長乃晨明志月

極てふ竹の陰り住ゆる

水青きふ田は子苗の伏見山

百五四  
一お句はつるふ端酌志を付子句

さしははしと誰よ終は

是為家姑一雨とさるやうに

昔の雅のやうにん秋をえ

病より凡雪の宿を

百五  
一ふつあきとらふにうをたのりて付句

うのきい半とあやのせうき

ふのせむち〜とせよあ〜らて

ふつふらとらとらふりつ

春風よりのいさなけりけりて

一葉句よりあ所をほき〜

誰ふとらんすやせし山陰

道乃多に柳のゆく梅咲て

田舎とさくむぢぶうあ〜

鹿野一志竹一村一花咲て

夏七  
一あ句のわらたなすき〜とらぬは〜りてぞ

らき〜あ〜りて付句

思ふよも〜らあをふ〜

わさくもあつてもらふあせむ

あつていふやあつて思ふ

きり月よあつてむよらつて

一葉句よとらつてやとふよふあつて

あつていふやあつて思ふ

別ていふやあつて思ふ

あつていふやあつて思ふ

あつていふやあつて思ふ

あつていふやあつて思ふ

あつていふやあつて思ふ

一葉句誰やとらつてやとふよふあつて

わとらつて

あつていふやあつて思ふ

あつていふやあつて思ふ

あつていふやあつて思ふ

月とらつてあつて思ふ

一付句は末よふと添へら得る句

うこるやあは葉松凡のち

らよきまゝの花はよもはなして

花よよらまゝとては残るやまはらとん

らつ末よあはれりりり

侍もぞいねとせしとらひはく

恨もせしやうけてあはれとら得る也

景気よあはれと付く句

你心巻よあはれり

杖の葉はわらわ月うすく

煙の簾の里のあはれり

小舟揺るく心と書あはれ

川うらなゆくとをわら

まづ春の月よ一花うら

雨勢の明ゆく志がたは海

秋志の杖はうらなれり



百三  
一とどぞやまに付栞あり  
七式

思ふしやらぬまよひあり

まよふね一棹と今の命めあや

とくしとまよひのあし

絶ねきまひとまよひのあし

とくし雲のまよひもまよひ

昨日一富士の根つら朝霞

夏三  
一よむらひとまよひて付栞あり

世よまよひてまよひのあし

老の返つるまよひもまよひ

とくし國のまよひのあし

世のまよひとまよひのあし

栞のまよひとまよひのあし

朽木にまよひのあし

まよひのあし

老のまよひのあし





人行ゆらり

国よ入月ハ

後ハけ田我

より新

定 我のま

心陰は

統のう

あ

胡志

遠く

定らん

うー

一<sup>鼻</sup>し

人

一

あ

一 稟

芳りて地ありし書れやうら

同くこゝろぬ付録

かたれ乃月やあはれもあは

妹ゆつた音おの橋小倉山

とこしとてゆくあしりもあは

なまこんけつかりあつるふし

一 <sup>稟</sup>とこいふよは信康二橋ありわさつて付録

あはれぬもそはく人あはれ

道くれきしはたはなまわき

色くわつる世の中ぐうた

桜花のまをく人と雨ありて

一 稟  
とよやあて付る

じうをさあはぶ神があは

里はあはして花のこぼれあは

とあは田ここの情あはり

人とあは初は花らうまをわ

花のうらみはさかすかに

あはれ

あはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

かたはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

あはれはなほのうらみ

一物もなほこころの志の有あはれにて付録

よもぎのちよよはもあはれあま

らぬ花老もあはれもあはれあま

あはれあはれあはれあはれあま

そのあはれあはれあはれあま

あはれあはれあはれあはれあま

槿の花もあはれあはれあはれあま

津島くしりもあはれあはれあま

わらわもあはれあはれあま

あはれあはれあはれあはれあま

行を田あはれあはれあま

一物もなほこころの志の有あはれにて付録

目のあはれあはれあはれあま

まぢあはれあはれあはれあま

昔あはれあはれあはれあま

志本とあはれあはれあま





鼻  
一 鼻の付様

と井を流るる一、秋を有

中地づらりるる

里の灯きこふお夜よ

あつちの鳥籠

向はくたふらふら

花もらりるる

月ちりるる

鼻  
一 鼻の付様

蜜のきくもはらりるる

又浪もきえていりえて

一花のりるる

やそそえていりるる

鼻  
一 鼻の付様

又ころりるる

とつらりるる

鼻

又部へはるる事なり

寫りし事なり

又人部へはるる事なり

今一月廿二日申す事なり

又人部へはるる事なり

又人部へはるる事なり

百平

一平久公事なり

又人部へはるる事なり

又人部へはるる事なり

又人部へはるる事なり

又人部へはるる事なり

又人部へはるる事なり

又人部へはるる事なり

又人部へはるる事なり

又人部へはるる事なり

又人部へはるる事なり

百平

山部公武の御歌

百集  
一 久多の鳥付の事

久多の鳥付の事

部公武の御歌

百集  
一 孫の白と下と歌の事

あはれなる事

咲花と木立の下

まにまにの事

心算の事

思案の白く

乃るやはしる事

百集  
一 小歌の事

折ふ方の事

うき世の月よみ

清い事

うつくしき事





夏  
一これとつゝ廻り付極

こは朝よりやうらん

まはれぬあはれ契り人の秋いきん  
この宇治川をたたらふ舟の  
舟のゆるる水はあつと花咲て

夏  
一こはつてまをきにけり極

はせあやなとくちとあまの  
まはれぬあはれ契り人の秋いきん  
まはれぬあはれ契り人の秋いきん  
まはれぬあはれ契り人の秋いきん  
まはれぬあはれ契り人の秋いきん

夏全  
一はくのもおれまよ付候

全

杉のうへうへにやぶのうへに

あはれもそれ人のうへに

なわと胡蝶のうへに

ひまのつくとまよふ雲のうへに

いよあんなやしのうへに

泳はくまもあはれまよふうへに

夏全  
一お句の末老字より角らくよ付候なり

一又字付やうし

のうへにまよふまよふ川

うのうへにまよふ月の影

都のうへにまよふすけ

うのうへにまよふあはれ

夏全  
一まよふとまよふまよふ

まよふまよふまよふ

まよふまよふまよふ

全

後山のつれなきはな

野眠ふ例崎は種釣をわて

あはれうらあやめし人のま

しる事ささむらひく水もく

百五十一 例崎のつれなきはな

深ふしじふ春のおもひけ

あはれうらあやめし人のま

あはれうらあやめし人のま

清水きく岩根の月つ交りて

百六十一 例崎のつれなきはな

あはれうらあやめし人のま

任境しきの菫は花はく

百六十七 例崎のつれなきはな

わらぬ御をきうらえづる

誰うらうらと枝の中道は露らん

例崎なる杉やみきふかぬん



去砂の月の長流をゆき

頁六  
一これと子詞の付換

こわがらぬ袖のゆりあ

侍のよめのなまきす又きえて

こまきみよそやともひ螢火

友菜の流よとれぬ花さけく

頁七  
一とくしやまの付換

そが洞と毎袖のうらん

ゆくはちや半男小叔のぬ

とそも急流を流りやせん

後の世に鏡よ二人むらや

頁八  
一ちうり文字と下の付換

きくれ草のゆれも花さうそ

一本衣しとそ家杜の野

池よほひそられ花とあまふ

結ね想しまを乃山はを

一 成敗のよてあまらふ付帳

五

うへ付よ地きくすのりせ

我まぬく首れ者の花すま

舟のあふれ老水と

海つめる川道れ浅芽色付て

一 <sup>百五十二</sup> やよのてあまらふ付帳

とらひあへくさひりの夜さ

うぬま道よのちて隆奇よ

しひつやの果とさひん

班雨とまゆおまうくもこうね

一 <sup>百五十三</sup> かぶのちあねあふ付帳

まよふるぬこあゆむん

国もねや枕もねねし抱え

やまひふとりのあさうらぐん

独り人ほこすまうく山里ト

一 <sup>百五十四</sup> けりあまらふあねあふ付帳

六

こころをうらみかきしるゝをね葉  
先立ともうちは都もさうわて  
ゆゑともうき世よかゝるまの法  
ねの葉と唯釣くまゑもさうして  
いとこれもあはれいと付松  
人とうねむいとさうん  
えわこゝろのうらみかきしるゝ月  
君よらうとくまゑもさうん

一いつこれもあはれいと付松

けらまをわさるゝ葉の葉  
月よもらうらむいとねむん  
雨きこゝろのうらみかきしるゝ

夏五  
一いつこれもあはれいと付松

わさるゝ袖もわさるゝ葉  
ねの葉と唯釣くまゑもさうして  
ゆゑともうき世よかゝるまの法  
ねの葉と唯釣くまゑもさうして  
いとこれもあはれいと付松

頁七  
行よりぬり付候

らふらふまやけよほらん  
物新まきえぬ先も花散て  
いづへてをらん付候

見てしつゝ思入るれ  
なまきんたる菫の葉ふゆざら  
一らるしつゝあをらん付候  
まじりしつゝ比る面影

まきつを長舟の末れ雪よんて  
まよひしつゝうらもろわもろ  
又月夜神らりしつゝあをらん

頁十  
川邊付

ふとよもさうらふらふ  
浦へま行ゆまきつ後松の風

頁十一  
一山崎こま切付候  
雪はゆきと雪舟清比



わひよき新枝玉乃毒味  
おち海よ乃心まの月  
去乃秋志之し小舟もま  
一糸白のりけいけい付る積

頁五

まうし海口畑をば葉の菫  
おしく入もぐ月暮し  
偽りつりりあすこゆる  
橋よのふ家常はくちん

頁六

一糸白のりけいけい付る積  
葉付とみや一葉ちん  
是安の心は嵐の秋  
綿のとり文字も織らん  
ふり海のおあをさけら旗の  
一糸白のりけいけい付る積

頁七

飛志ひひひもあつあま  
月うらな将場は雪の朝が

夏先

一 上あやあきなるもさうそ付句

百

うすき帯かゝる心身は胡胡

秋の衣と行よたごらん

浦へすし難波のまは胡胡

延雲もかこはるはるらん

夏先  
一 上あやあき

ふかやぬはあやあきらん

時をわすまの月はあき

夏先  
一 詞の意

うすき帯かゝる心身は胡胡

うすき帯かゝる心身は胡胡

夏先  
一 名所を付く様

うすき帯かゝる心身は胡胡

うすき帯かゝる心身は胡胡

夏先  
一 詞の意

うすき帯かゝる心身は胡胡

百廿三  
一 尚玄郎少乃伴

白川と雲の雲よえらして  
かうらりかきさるるに雲は  
亦これしきと水の海は  
ふみ舟らり此まじふも  
青柳の影をれ煙は晴く  
みきん枝しあうりり心  
五月ぬれをり柳水らて

百廿四  
一 一日を付く候

書もくしやあかたん  
湖湖舟り波を浪とて  
りつたし乃かか  
あつさよのの雲れおみへ

百廿五  
一 季と付く候

海をまふたもふく書なり  
みか人あらしむる月をさか



百六  
二子とて極

月乃又書留れあまの

都が極うはまにたあす

百七  
一本ふのわる連奇

うのまさとわらぬらと

因をひてはく家人やうはん

負松取季定忠は見回危

おぼれとめては凡うぬ

考のひもあまのけ

用書ふ鳥鳴尚サ

鳥の音さうもふ起別あり

はくはるかやん胡とまの

鶏既啼忠は待期

是も佛の通とてあれ

うのわらくうもあまのけ

は花經文乃至童子戲聚砂以爲松塔

巻之三  
きよゆふありて霞の本末は

詩日輝霞遠近有同聲

湖川若煙や押ま流る水

陸地逐目水煙を流

一本説乃有句考半

河のこりねは後乃わりの出

塚のこり生田若とりの葉の系

ゆふにのりて中れつらり

まは熱いさみの一なる海ありて

言句一

えぬ清もさうな茶さう海のま

あはよもきつらわん茶清のまをひや

掃よらひひーの雪もいふ

茶生若の雪とらうらう雪のま

夜多れ牛の相志一葉うれ

見九  
一本説之茶句

待人よりまぢやうひを病の毒  
本は棄て都と柳はしは  
いしうふれつとらん老のま  
紅葉のくさる浦の若屋  
波こらぬ水も花うまをしか  
うらぬあぢやうあぢやうは星  
雪はつちぢのあぢやうのま  
あぢやうはくさる雪は梢うね

一期をうけし書

音をうけし書  
あぢやうはくさる雪は梢うね  
いしうふれつとらん老のま  
紅葉のくさる浦の若屋  
波こらぬ水も花うまをしか  
うらぬあぢやうあぢやうは星  
雪はつちぢのあぢやうのま  
あぢやうはくさる雪は梢うね

本紙の種を半一委の同質註しり

道  
一申 秋をんをわけて付か換

あは素の後の陰がらわお

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

あしとことあふり一月よあ本因由

わさくらさきいさひさく

若菜のさきいさひさく

高引の箱持場高引のさきいさひさく

高引のさきいさひさく

又わさくらさきいさひさく

引月ゆらみさきいさひさく

高引のさきいさひさく

若楓さきいさひさく

若楓さきいさひさく

若楓さきいさひさく

若楓さきいさひさく

若楓さきいさひさく

若楓さきいさひさく

若楓さきいさひさく

若楓さきいさひさく

けしきとてはるる

尊

まよひの葉のまゝに持のき

勢のこころをたよとて

邦の鳴ける方とてしるはるる有るは目とて

一本<sup>音</sup>并ねの詞とてよの物とて

神のまゝに持のき

まよひの葉のまゝに持のき

まよひの葉のまゝに持のき

まよひの葉のまゝに持のき

まよひの葉のまゝに持のき

まよひの葉のまゝに持のき

まよひの葉のまゝに持のき

まよひの葉のまゝに持のき

まよひの葉のまゝに持のき

まよひの葉のまゝに持のき

まよひの葉のまゝに持のき

尊







獨寢い姨於山の月が終りや

我々すゝ山あぬの文料や姨於山よ思ふ月とて

一漢和の句

吟詩欲満囊

花のうらまゑ志手白くあはれむわ

消陌雪如埃

らるる人好ゆきよきよきよ

心事乱如麻

ふき起さる川敷すく〜あや

泉色哀又雨

雲のわらふとさふらふ

燈残孤客床

よもす〜ぬれもぼろ〜あや

一初生 中後付横方事一足初ん付横方

んや花志流よ有らん

人郵一人の毒

初生

かゝるにふたつにちかやせん  
まゝうらなる角七れ袖雪  
残とく縁乃程のみえり  
新まる尾とれ雪のひらり  
孫人も又やうれ世よりあらん  
わゝの俣のりりつさかむ  
ねくちあはれにむあはれつる

中ふよ

あらまよとちよふりてさあ  
きよめめいも何よらと  
命よふもあぬきぬ  
りやーやらあちまのまや  
一長ぬくよあかぬま  
きつたもよ又縁のちか  
しよよかまよらりて  
らぬまよのい武士かむ道



名通相談

青十二

一宗通の雑談よとよ法連袂の他分中  
うさあ〜トよのち親親の中思あうと  
〜あ〜

遠ぶ〜やまをら〜法ん

霧〜の高根を極雨をわて

因津代舟よれとよあはれ和回の東

就両句とよ惟とわも遠〜の表〜の表

うくよら〜るあ〜わて〜高根いつともえん

あつと親親もやわらん又凡つと〜の和回

あふまと付〜つともえんあ〜れも〜法

か〜ひ〜ら〜ら〜と他人の中よま〜のやあ

らえとわ〜ら〜

一兼我の相談よ中右の法親とあ〜のこ

よ〜く〜ら〜ら〜あ〜のあ〜は〜ら〜じ

さ〜き〜と〜ん

夕書いしむまふらあへんて

月しりぬらあひかると

雨ちきふ月あつり

らあひしり夕書らあへんて

月しりぬらあひかると

又夕書雨あへんて

て熱う後あへんて

ちり夕書らあへんて

はくとあはちしきん

しん

一基作のきあへん

こしき

行よん

あまのぬねのり

あまのぬねのり

うらやまのぬねのり

しつとていふなりしに海に舟をゆきしに  
あつて又後橋の邊に舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに

一宗長の子下は白の髪に舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに

あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに  
あつていふなりしに舟をゆきしに

一或人宗孫の連飲をき極つたやうな聲を  
もつて立ち上りて返中へ向つて時を待たせ  
連飲のまじり茶の匂とあま〜ゆめゆめと  
〜を共にとあふよとあく大切なる事とあ  
うよゆ〜あ〜ゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
ゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
あうとんとんと〜ゆめゆめゆめゆめゆめ  
ゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ

今合く〜わし相違する所多しと出さん因ら  
先あ三句と〜合てし〜ゆめゆめゆめゆめ  
合てあ〜ゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
ま〜ゆめゆめゆめ

一或人宗孫の連飲をきゆめゆめゆめゆめ  
く〜ゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
病よ素とわ〜ゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
ゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ

ゆるぐ大業より中へ得ていふ病  
も大業斗あふあふんいぬる人  
争もとくはもよまは斗とせんと思ふ  
いんせよまはもらちりていふ  
かろしつちるんもいん

一船巴八相法も多ゆ急せりふいあまら  
天竺唐去かゝ遠ざらひいふはあ  
佛教神なるもあふんをいぬる人

ま中一文字いふゆいふらりあま  
をいん

立ちりて染さゆさるも  
とらん業句いふのりつねまあてり  
ひ也ろわを

立ちりて染さゆさるも  
をいん  
十五夜のみ光句





予は會の附の奴の蓋とあふのまをいせし  
この故に前後のまを結講する

一執事持居振わまり候貴人御沙汰にて  
云々志安唯とぐりず右の膝膝と立し  
上方より御詞わらむごう候とくし常此  
夫人御前にて候とて候の極は居まき  
一懐胎を以て賦とて字とてあはま  
りてまのて候とて候とて候とて

去席の美人の志の方とて候之賦賦定む

今一夜候とて瑞他より案句を定むとす

又候瑞他に賦行の連歌と書とて候とて候とて候とて

いそむとて候とて候とて候とて候とて

賦とて候とて候とて候とて候とて

進条の人の連文抜候とて候とて候とて  
打越まて候とて候とて候とて候とて

かゝるを一面もいひつゝいふは  
一泪は直に随ふ(まじ)

一もと並に披あつて  
と披あつて披あつて  
かゝらとむとむ

一素人け御白の披あつて  
とつて書く披あつて  
とつて座とつて

時分納めしころをまて披あつて

一夢想の連なりぬ  
とよ郵へ一頂が来ぬ  
懐紙と折もて  
又度よ金さゆまた  
あつてあつて  
まて文書  
あつて

やうして讀しんく服の白紙来ぬし字は  
うまらりてまゝ一教句と亭主らりの  
魚一執事ハ神龜ハ不代なりと執事ハ  
わらわら半ハ珠湯之妄想志連方ハ  
ひふ字とせし

一執筆ハ勿論一たのめ之其席志真無由  
執筆ハ才ハよるあつて味もあやけり  
指合とく考一言月志志之所とんりも懐

紙面志手江も事一其外菓子も  
茶のむつり付物りなごし連音も  
ゆもあつてよるあつて味もあやけり  
也しりくも執事ハ才ハよるあつて味もあやけり  
あつてよるあつて味もあやけり  
あつてよるあつて味もあやけり  
あつてよるあつて味もあやけり

會席ハ得る事



概もその内へ到信より内へあひつゝる  
ととの所地とよ遠道方人なるや

真書云

這一冊初めの人一見より布の心あり  
いふ事いふべから師説を可く受く者也  
所詮長身乃黒用より師水よりて書  
といふべき先但一道不納得志者せん  
不反相傳者也完賢

跋

凡連奇之故實家と密之而不  
輕傳學者性く憾焉連奇至要  
鈔為書也上自二條良基公下  
至宗祇及兼載宗養紹巴諸家  
之秘説逐一集之以此大成矣不知  
何人之編著也誠浣錦於蜀江

琢<sup>カケル</sup>玉<sup>ヲ</sup>放<sup>ナ</sup>崑山<sup>ニ</sup>者也<sup>ナリ</sup>遂<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>耐<sup>ハ</sup>珍<sup>ク</sup>藏<sup>ス</sup>  
可<sup>ク</sup>刊<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>流<sup>ラ</sup>干<sup>ク</sup>四<sup>方</sup>云<sup>ハ</sup>尔

貞享五<sup>戊辰</sup>歲

仲夏中澣

書林

江戸西村氏半兵衛

京小丸台半兵衛

大興志

